

「知識」「活用」を一体化した問題へ

8月22日、文科省は、来年度からの全国学力テストの調査問題の作成方針を一部変えることを明らかにしました。今まで、国語・算数（数学）について、「知識・技能」（A問題）と「活用」（B問題）と分けて実施してきたものを、一体化するというものです。

一体化によりテスト時間が短くなるので、子どもの負担が減るのではないかとありますが、実際は問題点の増大が予想されます。

1 中学校での英語調査実施に向けて

来年度からの中学校での英語調査に対する不安が広がっています。教育委員会関係者からは「絶対反対である」「やめたらいい」「抽出で行えばよい」、学校関係者からは「多忙化に拍車をかける」などという批判の声が上がっています。

また、内田洋行がまとめた今年度の英語予備調査報告書からは、学校・生徒に対する負担が大きいこと、また「話すこと」の調査では学力が把握できないことが明らかとなっています。

文科省は、英語調査の全校実施を「円滑」に実施するために、国語・算数（数学）のテスト時間を短縮しようとしているのではないかと考えられます。

2 「知識・技能」の軽視と「活用」の重視

文科省は、「A問題を通じて学力の底上げが図られた」ので一体化するとしています。そして、「従来A問題の中で測られてきた基礎的な知識・技能は、・・・調査問題の大問の中の小問の1つとして出題するなど工夫する」として、サンプル問題を掲載しています。

このような一体化により、「活用」の問題の中の小問に一部「知識・技能」の設問が設定されることとなります。当然、今でも少ない「知識・技能」の問題数はさらに減ります。また、「活用」の問題文（長文、複数文）を読んだ上でないと、設問の意味が理解できないこととなります。「知識・技能」が軽視され、「活用」が重視されることとなります。

3 子どもの苦しみ増大

比較的難易度の低いA問題があることで、子どもはある程度問題を解くことができます。また、普段のテストとは全く形式も内容も異なる全国学力テストに慣れて、ある程度B問題にも向かうことができます。それでも、テストが終わると、子どもはどれだけ出来ているのかと不安に思っています。

それが、一体化することで、いきなり「活用」の難しい問題に出会うこととなります。中に小問として比較的易しい「知識・技能」が含まれていても、長い問題文といくつもの設問を読まなければ、解くことができません。子どもの苦しみは増大すると考えられます。

4 「授業改善」はどこへ行く

文科省は、「調査問題自体が学校の教員や児童生徒に対して土台となる基盤的事項を具

体的に示すものであることを踏まえ、学習指導要領の下での授業改善に資するもの」として学力テストを実施しています。

「活用」重視のテスト問題からは、たとえ課題を把握したとしても、「活用」を伸ばす指導の必要性が出てくることとなります。その結果、難しい授業を展開することになり、学力格差が今以上に広がることが懸念されます。

一方で、「活用」の問題を解くことができるように、事前に過去問題などを使った事前対策が、さらに拡大することも懸念されます。

5 国家による学校教育への介入

実施要領では、調査の目的は、「児童生徒の学力や学習状況を把握・分析」することとされています。

ところが、文科省は、「学習指導要領に示される内容等を正しく理解するよう促すとともに重視される力を子供たちに身に付けさせるといった国としての具体的なメッセージを示す」としています。「調査」から、国が学校教育への介入するための「手段」へと大きく転換していくのではないのでしょうか。

具体的には、次期学習指導要領では、学習内容・指導方法から、評価・学級経営・生徒指導に至るまで、事細かに示されています。これを全国どこの学校でも「実施」させるために、全国学力テストを使って行っていくということではないかと考えられます。

- * 本文中の引用は「全国的な学力調査に関する専門家会議」の資料「知識・活用を一体的に問う調査問題の在り方について」(H30. 8. 22) を使いました。

また、以下の資料も参照しました。

「教科に関する調査をめぐる主な課題の検討について」(H30. 2. 16)

「問題作成の基本的な考え方 (平成31年度以降用)」(H30. 3. 16)